

諸外国との国交の始め

あまつひのおおみかみ
天日大御神（天照大御神）の御子の尊（天皇）がお治めになるこの大御国（日本）に、諸外国が朝貢

（貢ぎ物を奉ること）する事の始まりを詳しく調べてみると、まず

しきのみずがきのみやにあめのしたしうしめし
師木瑞籬宮御宇 【崇神】天皇 の大御代の七年（前九一）に、

すめらみこと おおみゆめ おおもものぬしのおおかみ
天皇の大御夢に大物主大神のお告げがあり、同十一年（前八七）に、異国の人々が数多く参つた

次第が（書紀に）見える。これはどこの国々とも分らないけれど、今思うに辺り一帯の近隣の小さな国々で、その当時おのおの独立した長がいたであろう国が、この御代より服従して、

すめらみかど
皇朝（日本の朝廷）の御法（法制）を承り始めたのだらう。それは「何々の島」などと名付けられ、後には（日本の）各地域に編入された島々であらう。

次に同じ御代の六十五年（前三三）の秋に、任那という国より使者が参つて貢ぎ物を奉っている。それは「筑紫（九州）から離れること二千里以上北方にある国」と（書紀に）記されている。この国はもろこし（シナ）の書物にも載っていて、後の時代まで戎（日本の西方の国々の総称、六頁参照）であるから、これをまさしく外国が参つた最初と言ふべきである。

さてその使者は、

師木玉垣しきのたまがきのみやにあめのしたしろしめし 宮御みやご 宇う 【垂仁すいにん】天皇すめらみこと の二年（前二八）、滞在六年目の年に御暇おいとまを頂いて帰国

したということだ。その時、赤絹百疋あかきぬ びき（二百人分）を使者に持たせてその王にお与えになっている。

同三年（前二七）、新羅しらぎの国の王子天日槍あめのひぼこが参る。

三韓の朝貢の始め

その後、

息長帯姫尊おきなながたらしひめのみこと 【神功皇后じんくこうごう】が神の御教みおしえに従って御自ら新羅しらぎの国の征伐にいらつしやった時、

新羅王しらぎのおおみはすぐさま大御船おおみふねの前に参上して様々の誓いを立てて臣下として服従し、その時から常に数多くの船に貢ぎ物を載せて奉る習いとなったのだった。この時高麗こま（高句麗）、百済くだらの二国も同様に朝貢して以来、この三つの韓からんの戎国やんこく、またその周辺の国々もすつかり皇朝すめらみかどの御法みのりに従ってお仕え申し上げた事は、世間の人もよく知っている通りである。

さて（朝廷は）そこに宰みい（地方官）を派遣なさせて、その国々の政務を執り行わせなさせ

た。『書紀』に「日本府」とあるのがこれである。

ところがその韓の国の『三国史記』、『東国通鑑』などという書物には、一言もこのよ
うな事を記述せず、皇国（日本）の事をよそよそしくもまるで自分と対等な国であるかの
ように言っているのは、その昔こうして臣下としてお仕え申し上げた事を嫌って省いたの
である。しかし中古までも、使者を派遣して貢ぎ物を献上することが絶えなかったのは確
かである。

また、もろこしの国の『隋書』という書物にも

新羅、百済は共に倭（日本）を大国で珍物が多いとして敬い仰ぎ、いつも使いを通わ
せて往来していた。

と言い、近世の明の時代の『世法録』という書物で御国（日本）のことを記述している箇
所にも

その属国は五十余りあり、新羅、百済もことごとく属国である。

と言っていることなどを見ても、かの（韓の国の）書物の内容が真実ではない事を知るべき
である。

三韓の歴史概略

さてこの三つの韓の国の中でも、百済はかの

姫尊（神功皇后）の御時より、内官家（直轄領）の国とお定めになり、皇国の内の皇室の直轄領同

然の扱いで特別に厚いお情けをおかけになり、（百済は）代々忠実にお仕え申し上げて来た。

ところが新羅は忠実ではなく、ともすれば逆らい申し上げ、（日本の）西の辺境の国を襲撃したことも時々あった。そしてついに

近江大津宮御宇【天智】天皇の御世（六六八―六七二）になって、百済は新羅・唐の賊どもに滅ぼされ、高麗もまた間もなく滅んでしまった。

さてその後、

寧楽宮御宇【聖武】天皇の御世（七四一―七四九）に、再び高麗から出た渤海という国

が（日本に）使者を派遣し、国書と貢ぎ物を奉りはじめて、延喜（九〇一―九三二）の頃までも絶えずお仕え申し上げた。

その後まもなく高麗の王建と称するものが、三韓（百済、新羅、高麗）の辺りの国々を統一して再び高麗（王氏高麗）と名乗っていたが、

後小松天皇の御世（一三九二—一四二二）に滅んで、その家臣の李成桂（りせいけい）と言う男が代わって立ち、国の名をも朝鮮（ちやうせん）（李氏朝鮮）と改めたのだった。昔を思えばこの朝鮮は、今も琉球（りゅうきゅう）（現在の沖縄）などと同様に、大御国に臣下としてお仕え申し上げるべき国である。

変わることはないもろこしの習わし

次にもろこしの国（シナ）は、筑紫（つくし）（九州）の遙かに西の沖合いにあつて、戎国（からくに）とも呼んでいる。戎（から）とは、東の方角にある国を夷（えみし）と呼ぶように、西の方角にある諸外国の総称である。

さてこのもろこしという戎（から）は、韓（から）の戎の西南の方向に続く非常に大きな国で、胡国（このくに）（ペルシャ）、天竺（てんじく）（インド）などとかが言う国までもひと続きになつた大陸の中で、東南の方に片寄つている。国の長（おさ）は、一般に外国の習わしで、古（いにしへ）より定まつた者はおらず、ただその時々（とき）に勢（いき）いが強くて賢（けん）い者がなつていた。

後宇多天皇の御世（二七四—二八七）の頃になつてからは、その北方（もつし）の蒙古（モンゴル）という国から出た者も長（おさ）となつて九十年ほど治めた（元）。またその後、

後光明天皇の御代の正保（一六四四—一六四七）の頃、その東北にある韃靼（満州）という国の者がこの国をも打ち取って、百三十年余りを今に至るまで治めている（清）。

このように変わらぬ主がないので、この国では定まった国の名もなく、その時々長になつてゐる者の出身国、または始めに統治を委任された所の名などを呼び、ある場合は新たにこしらえたりなどもするようだ。その中で、昔の漢・唐といった王朝は比較的長く続いたので、その血統が滅んだ後の世にも、ずっと漢とも唐とも呼んでいた。そういうわけで皇国でも、唐言葉では今でもこの二つの名で呼び、そのうちその唐の字を「もろこし」とも「から」とも読むようになった。

さてその長は、古代に周と称した代（前一世紀前二五六）などは「王」と名乗っていたが、黒田廬戸宮御宇【孝靈】天皇の御世（前二九〇—前二五）の頃、秦の始皇という王が周を滅ぼしてその国を手に入れてから、呼称を「皇帝」と改めた。この時に諸制度をも刷新し、その多くは今に至るまで用いられているようだ。

そしてその国の習わしは、このように主君を滅ぼしてその国を奪うのがいつも事なので、昔から下の者は上の隙を狙つて国を奪おうとし、上の者は人に奪われまいと警戒する

ものだから、上と下とは本心では信用し合っていない。互いに煩わしい考えをめぐらす余りに、すべての事に眞実はとも少なくて、ただ偽りや飾りばかりが多い。

さて主君の国を奪うにつけては、その恐ろしい罪をごまかすために、ある者は「天がお与えになった」(天命)などというような作り話を色々と用意して、文辞を麗しく飾り立てて人民をあざむき、また何事も決まりを細かくして尊い事に思わせたりするなど、総じてうわべはとも立派だけれど、心の中は悪く汚い国である。

しかしこのように何事につけても用心し、考えめぐらす事にすぐれているために、代々賢い人も多く出た。万事に不足なく満ち足りている上に、国土も非常に広くて勢いが強いので、周辺の小さな国の王共をも多く手懐けて服従させ、自分は「天子」(天命を受けて人民を治める為政者)と名乗って一段と尊く見えるように振る舞い、自分の国を「中国」(世界の中心の国)と呼び、周辺の国々を「夷狄」(野蛮な異民族)などと蔑み侮つて、天地の間に並ぶものがないかのようにむやみに驕り高ぶっている。

これらは皆この長の私事なのだが、機嫌を損なわないようにびくびくしながら服従している周辺の国王どもは、その掟を受け入れて天子と言って崇拜し、中国と言って敬うよう